



菅井菊叟著

菊花壇養種

東都書肆

甘泉堂梓



今日けふになつて菊きく作つくらふと思おもひけり、と二水じすゐが吟ぎんも宜むべ

なるかな。こは唯ただ菊花きくくわのみならず、世よの人情にんじやうは事こと皆みな

然しかなり。貧まづしければ富貴ふうきを羨うらやみ、日待ひまちに呼よばれて無稽むげいを

愧はづる。兼かねて心こころに係かけざれば、時ときに望のぞみて後悔かうくわいす。幼をさなき節ときに

学まなばねば、老おいての后のちに恥多はぢおほし。造化ぞうくわの儘まに転倒ころばし、育そだちは其その性質せいしつ

を見るみに足たるのみ。人亦ひとまた是これを羨うらやまず。珍花ちんくわと愛めで、奇きめう妙もてあそと翫あそば

る、は、栽培さいばい手入ていれの巧かうにあり。今爰いまこゝに夏過なつすぎて咲秋さくあきしべの

花はなも二葉ふたばの春はるよりして、実生みばへの養育やういく丹誠たんせいに勝すぐれて

※日待

もともと同じ集落の人々が徹夜で日の出待って、来光を拜む庶民行事であったが、江戸時代には大勢の男女が集って酒宴する遊興的な行事となっていた。類似の庶民行事に月待・庚申待がある。

※造化の儘

造化とは造物主によって造り出された森羅万象で自然・天然のこと。「造化の儘」で「自然の儘」の意。

貌かたちのよき花はなと、盛りさかを愛あいし、綿わたを着きせ、紙かみをも当あてて、世よのはれ

ものと誉ほめらる、養方やしなひかたを、培養つちこしらへの始はじめより、乳房ちふさに換かゆるぢよろ

の水飼みづかひ、風雨ふううの手当てあて、虫除むしよけまであまさず漏もさず輯録しふろくして、菊きく

造つくらふと思おもふ友垣ともがきの扶たすけの竹たけの杖つゑともならんかと、菊花壇きくくわだん

養種やしなひくさと号なづけて、作り方かたを根分ねわけして、慈童ちどう、淵明(2) ゑんめいの如(3) ごとき好すき

者しやの覧らんに備そなへんと云いふ。其そのいとくちを解とくことしかり。

弘化三歳

丙午之春

東都楓川市隠

一筆庵主人誌(4)



菊花壇養種 初輯

きくくわだんやしなひぐさ

此策子は、当世の洋菊を花壇に作る事を委しく誌せり。

漢土の○花鏡○種樹書○菊譜○菊経に載る議論、又は

○花壇綱目○地錦抄○錦葉集○花壇養菊集○草

花絵前集○草木育種 其他栽培の書を抜萃して、

花壇に養ふ菊の播種、根分、挿の時節、栽培の仕

方、菊虎、黒小地蚕の害を除く事、総て菊を作るに

種々の伝授ありといふ養方を委しくしるせり。

※菊虎

キクスイカミキリ。コウチユウ目の昆虫。キクの莖に輪状のかみ傷をつけて産卵し、幼虫は莖の中を下方に食い進み、根で蛹となつて越冬する。キクの害虫。菊吸。

※黒小地蚕

植物の苗の根を食害または食い切る害虫の総称。カブラヤガ、ヨトウガ、モクメヤガなどの土中にもぐるガ類の幼虫、甲虫類ではコガネムシ類の幼虫をいう。

菊を作る方の解画

①
 寒中肥し
 土を拵て
 春の
 貯に
 なす
 三色の
 土に
 砂を
 交
 人糞の外に
 干鰯魚
 を入る、



②
 二月初めに
 菊の種を
 蒔べき苗
 代の為
 寒中土拵
 せしを
 篩ひて
 管内に
 根分を
 植るは外
 地に肥し
 土を入る、



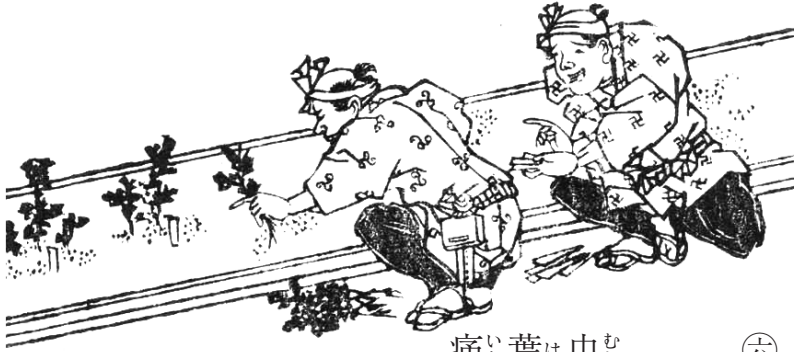
③ 菊の種を蒔たるが
 実生にして
 二葉となりしを
 如露にて
 水を与ふ



④ 菊の根分
 ともに
 手入を
 なし
 花壇に
 移し
 植んと
 肥し
 土を
 虫の害を防ぐ
 手当をなす



⑤
 花壇くわだんに
 菊きくの
 苗なえを
 植うえつけ付てて
 より
 虫むしの災わざわひを
 ふせぎ
 苗なえの
 いたみ
 植うえかゆる



⑥
 紙し燭そくを以もつて
 未明みめいに菊きくの
 虫むしを取とり
 葉はの
 痛いたま
 ざる
 為ために
 清せい水すい
 にて
 洗あらひ
 手て入いれに
 暇ひまなし



※紙燭
 紙や布を細く巻いて擦った
 上に蠟を塗った小型の照明
 具。

⑦ 菊の 育苗より 育てて 竹を以て 扶けと なし 花壇に 丈を揃へる



⑧ 菊花苔をもち 持て半開におよばんとする時、日覆障子をかけた花受に紙を当て花のひらくを待つ



菊花壇きくくわだん
花盛はなざかりに
なりて
愛翫あいくわん
する
菊きく咲さい
て



英泉
画





○中菊根一本にして

数百の花を持

葩を揃へて

不同なく

咲する

筭

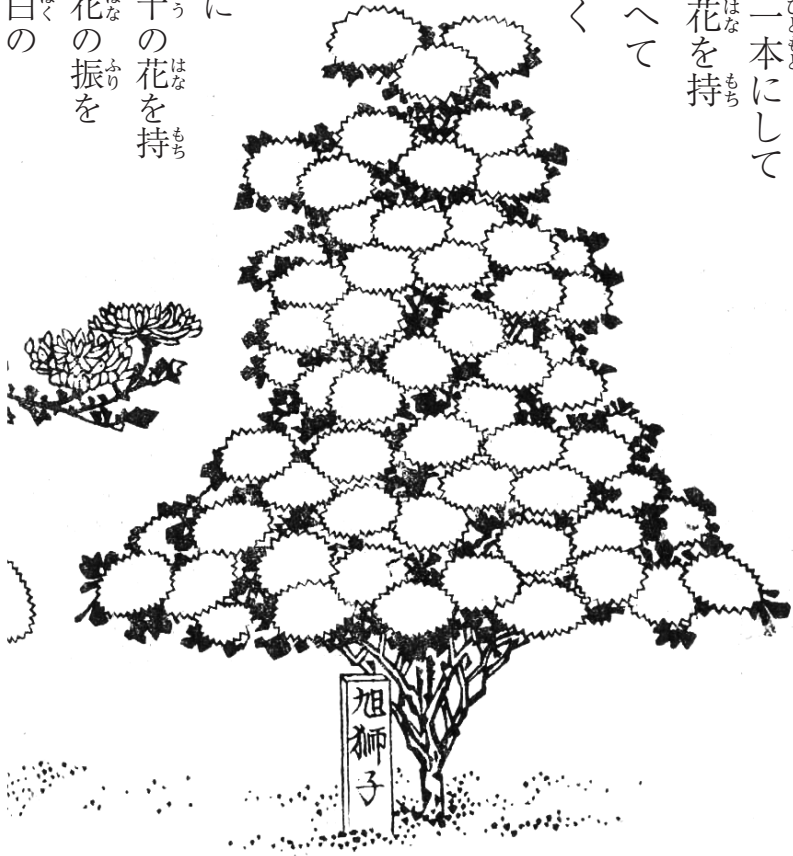
作り

○根一本に

して数十の花を持

枝に生花の振を

付て紅白の





咲分さきわけに
作つくる

○白菊しらぎく

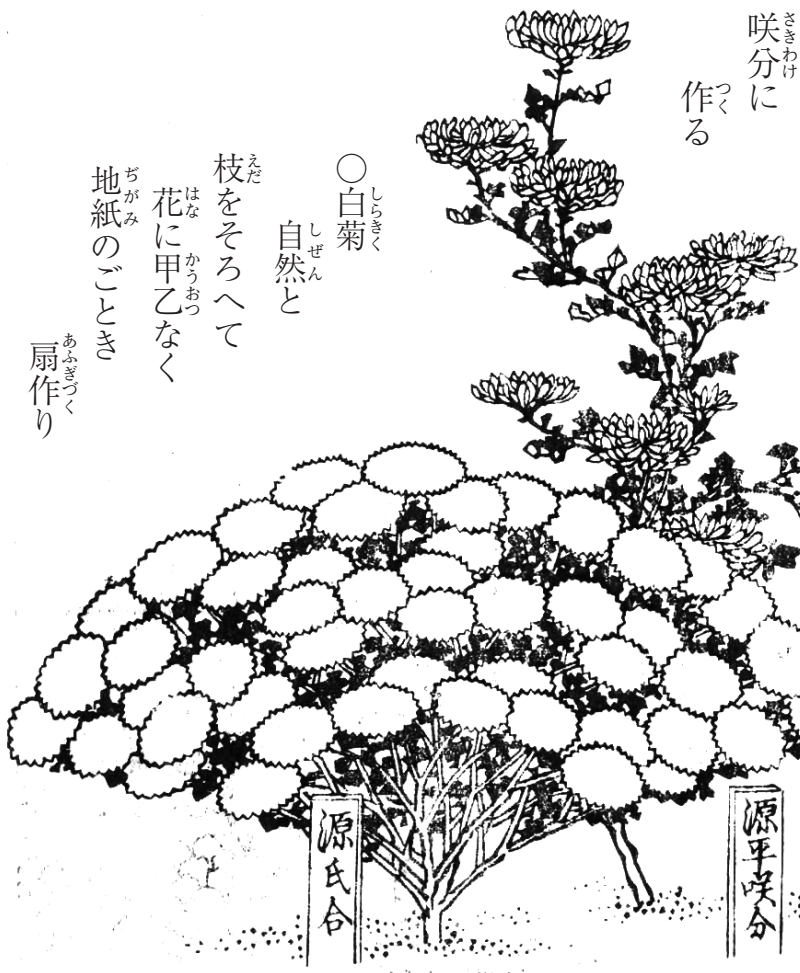
自然しぜんと

枝えだをそろへて

花はなに甲乙かうおつなく

地紙ちがみのごとき

扇作あふぎづくり



菊きく珠しゆ宝ほう黄き

前ニ有リ芙蓉一後ニ有リ梅

歳一寒ノ心事向テ誰ニ説ン

傲ホコレ霜ニ不レ入ラ二時一人ノ眼ニ

独有ニ淵一明一識リ得テ明ナリ



溪斎

英泉画

※歳寒さいかん

寒い季節の意。

※時人しじん

その時代の人々の意。

きくくわだんやしなひぐさ
菊花壇養種

きく
菊の大意

わかんきく うえ あいくわん
和漢菊を栽て愛翫する事、
わうせき
往昔よりいと古く伝

いまま はい
へて今に廃することなし。
ほんてう
本朝には称徳(15)光仁(16)の御代なるべし、

はくさいこく(17) ごしき きく たね けん
百済国より五色の菊の種を献ずと
いへ
言り。類聚国史(18)に

くわんむてんわう きく ぎよせい のせ
桓武天皇の菊の御製を載られしは、
きく うたふる
菊の歌古きものに見え

はじめ
たる始なるべし。公事根元(19)にも重陽(源)に菊花の宴行はる、事ことは

見えたり。まんようしふ
万葉集には菊の歌うたをいれ入られず。抑菊(19)の文字もんじは、説文(20)

に本鞠もとぎくに作るつく。爾雅じが(21)に曰いはく、鞠ぎくは治牆ぢきやうなり也、郭くわく(22)が注ちゆうに今いまの秋しゆう

華菊くわきくなり。集句しふいん(23)に或あるひは執鞞げいきく亦また菊きくに作るつく、通つうじて菊きくに

作つくると云いへり。菊きくばかりは和訓わくんを言いはず音おんの儘まに唱となへ来きたりしにや、

和名抄わみやうしよまつ(24)には加波良かはら与よ毛木もぎまた可波良かはら於お波岐はき、夫それより后のち

異名ひみやうして秋あきのはなしべ、翁草おきなぐさ、或あるひはなでしこ、せきちくなど云いへる唱となへ

見みえたり。唐土もろこしにては節花せつくわとも云いふ。月令げつりやう(25)には女節ぢよせつ・女華ぢよくわ、又また傳ふ

公こう・延年等ゑんねんとうの異名ひみやうを載のせたり。延年ゑんねんと云いふは、周しゆうの穆王ぼくわう、靈鷲れうじゆ

山せん(26)に積尊しやくそんの秘文ひもんを受うけ、慈童ぢどうに伝つたへ、八百余歳やひやくさいにして貌尚かたちなほ

少年しょうねんの如ごとし。是これ菊潭きくたんにありて、常つねに菊きくの露つゆを喫きつして長てう

寿じゆを保たもちしと云いふより号なづけたり。其その下流かりうを扱(汲)て吞のみし山里やまざとの村民そんみん

悉ことごとく命長いのちながしと云いへり。其その后魏ちぎの文帝ふんていの時(27)、慈童じどう・彭祖ほうそと自呼(28)

て山いより出いで、此術このじゆつを文帝ふんていに授さづくことぶき。寿七十歳さい、是ちやうやうより重陽えんおこの宴起えんおこ

れりと云いふ。又また西京雜記せいけいざつき、続齊諧記ぞくさいかいき等とうに載のする、汝南ぢよなんの桓景くわんけい、費(31)

長房ちやうぼうの教を受しへうて、九月九日きゅうがつきゅうにち高たかきに登のぼり菊きくの酒さけを飲のみて災わざわひをのが

れしと云いふ故事こじより、重陽ちやうやうの菊きくの酒さけの宴えんは起おこれりとぞ。本朝ほんてうにて

も、昔むかしは天子南殿てんしなんでんに出御しゆつぎよありて重陽えんおこの宴行おこなはれ、群臣ぐんしんに菊きくの

※菊潭

宋代の史正志『史老田菊譜』には、南陽の隴県（河南省内郷県東北）に菊潭があり、その水を飲む者はみな長寿を得たとある。

※費長房

中国随代の人。仏典の漢訳に功績があった。

※南殿

紫宸殿の別称。

酒を賜りし例あり。亦十日十一日に至りて残菊の節会行はる、

を、後の菊の宴とも残菊の宴とも唱へて、京師の児女再会して

小重陽の宴をなすこと、月令広義・歳時記等に見ゆ。九日小

袖菊襲の事も諸書に見へたり。菊の着せ綿のことは御湯

殿の記、世諺問答等に見えて、九月九日の夜に入、南殿の階に

菊を多く植て、是に赤白黄の染綿を着せ、菊花のごとく

枝に付ると云り。是菊花を弄ぶのあまりに霜を防ぐの心なる

べしといふ。昔より斯菊を愛翫せしかば、菊の節句を以て

※残菊の節会・菊の宴・残菊の宴

残菊とは九月九日の重陽の節句を過ぎて咲き残った菊のこと。残菊の節会は、一〇月五日、残菊の花を賞して催された酒宴。

※京師

原義は多くの人々が住居する所の意で都をさす。

※小重陽の宴

重陽の節供の翌日に催された親菊の宴。後宴ともいう。

※菊襲

秋に着用する女房の重桂（かさねうちき）の色目あるいは、五衣（いつつぎぬ）の配色の名。

五節ごせつの終をとす。唐土からくににても菊きくを隱逸ゐんいつなるものと愛あいし、君子くんしなる花はなと称しやうす。皇国みくににても菊亭きくていの大臣おとぎ、諸越もろこしの佐国等すけくに、此この花はなを勝すぐれて愛翫あいくわんせし事世ことよに聞きこえたり。斯愛かくめでたき花はななれば、貴き賤せんともに最愛もつともあいして秋あきの録ながめとすべき事ことならずや。

○菊花種類きくくわしゆるいの事こと

凡およそ菊きくの種類しゆるい実生みばへにしては、年毎としごとに花はなの貌かたち変化へんくわして年々としごとに殖ふえ、其数そのかずを量はかり知しるべくもあらず。漢土もろこしにても花鏡くわきやう・菊譜きくふ・菊経きくきやうに載のする処ところ一百六十三品ひんとし、或あるひは三百余种よしゆ

※隱逸

俗世を離れ独り山里などに隠れ住むこと。

※菊亭の大臣

藤原北家の流れをくむ今出川家の別称。

※諸越の佐国

「後拾遺和歌集」勅撰に功のあつた平安後期の漢詩人大江佐国のことか。

と云り。皇国に伝へては其種類幾千万、花の変り有を

知らず。大菊は花壇に作るに宜く、中菊もまた是に次べし。

小輪の菊は插花に用ひて宜し。葉種食料の料理菊も

多くは小輪の菊なるべし。小菊と云るは禿菊・甘菊の類、種

類殊に多し。夏菊は中菊・小菊のみなり。寒菊・野菊も

小菊なり。不断菊と云るは夏より花咲て初冬に至るまで

絶す。近來花壇菊に黄宝珠と云る花あり。尤奇花也。

貌手毬の如く大いなるは渡り五六寸ありて殊更愛すべき

菊きくなり。白しろもあり、紅くれなゐも見えたり。各々おの／＼作り形かたによりて花はなも変かはるなるべし。古ふるくより有ありふれしは、箒ほうき作つくり・扇あふぎ作つくりにて
其その余よは花壇くわだんの直すぐなる大輪たいりん作つくりをよしとす。

○菊花きくくわ栽えつ 培つち播種かひたねの事まきこと

草木さうもく俱どもに土地とちに相さう応おうせざれば繁はん茂もせず。応おうずる時とき

は地ち気きさかんなるゆゑに薬種やくしゆはき、めよく、食物しよくもつは味あぢはひよし。

東都とうとにては、巢鴨すがも・染井そめいの辺へんは菊きくを造つくるに妙(35)めうなるゆゑに、

古ふるくより名物めいぶつの聞きこえあり。故ゆゑに草木さうもくの養方やしなひかたに精くは密しき者もの多おほく、

昔むかしより其その業なりをなす者ものあまた有ありて、栽培さいばいの事ことを誌しるせし

書ふみなどをも著あらはせり。地錦抄ちきんしやう、草花絵全集等(前)あまた

ありて世よに知しる所ところなり。素菊もとぎくは根分ねわけけをよしとす。親木おやきの種たねを

失うしなはず、爾しかれども親木おやきの古株ふるかぶよりは虫むしを生せうする事こと多おほければ実み

生ばへを養やしなふにはしかず。実みを蒔まくには培養つちこしらへを第一だいとす。山やまの野の

土つちの肥こえたるか、黒くろぼく・赤土あかつち・青土あをつちの類るい、湿しめりなき土つちをよしとす。

菊きくは湿しめりち地いむを忌いむものなり。地所ちしよたか高ひく日当ひあたりよき所ところに、代しろと云いふて蒔まくべ

き床とこをしつらひ、肥土こやしつちを入いるゝなり。土拵つちこしらへは野土のつち・黒くろぼくともこれに是

※黒ぼく

植物の栽培に適した腐植土のこと。一般にクロボコと
いい、クロボクは植木屋詞。

※野土

腐敗した植物質を含んだ肥
沃な土。

まで菊きくを植うえさる土つちを用もちゆべし。砂真土すなまつちをよしとす。地錦抄ちきんしやうに合あはせ

肥こひと号なづくる法ほうは、野土のつち一斗いつと、真土まつち一斗いつと、赤土あかつち一斗いつと、三色みいろを交ませ、これに

人糞こやし一斗いつとを以もつて煉合ねりあはせ、藁わらの灰はい、又は糠ぬかを炒いりて切交きりませ、寒かん

中ちゆうより雨あめの係かからぬ様やうにして、五十日ほんど程ほどいてさせ貯たくはへ置おくなり。最もつとも

人糞こやしを二度どほども切交きりませるなり。二月ふたつきの節せつに至いたり、是これを墾こなして土つち

篩ふるひにて細こまかにふるひ、日ひに曝さらし代しろの土つちと入いれかへ種たねを蒔まき、其上そのうへに藁わらを

至いたつて細こまに切きりし塵ごみを少すこし掛かけ、雨覆あまおほひをして置おき、苗生なえはへてより雨覆あまおひ

を取とり、日ひに当あて、如露ぢよろにて水みづを少すこしつ、澆そぎかくるなり。是こゝよりの手入ていれは奥おくに

※砂真土
耕作に適している良質の
土。

○菊根分の事きくねわけ こと

菊きくの根分ねわけは九月・十月ごろ、親株おやかぶの根元ねもとより出いでたる芽めを分わけ取り、別べつに肥こやし土つちに植置うえ置き、蘆簾よしずを低ひきく係か、霜除しもよけをなして

養やしなひ置おき、春晴明はるせいめいの頃ころ※、花壇くわだんに肥こやし土つちを入替いれかへ、五六寸つゝ、隔へだてて

星ほしを堀ほり、鳥とりの尿ふんと烟草たばこの茎くきを細こまかに切交きりませて是これを星ほし一つ

宛つへ入いれ、菊きくを一本ほんつゝ、植うゆるなり。苗なえの実生みばへを植うゆるも同おなじ事こと也。

植うやうは種樹書しゅじゆに
くはしく出たり六七月ごろ糞汁こやしを根元ねもとへ入いれべし。肥こやしを多おほく

澆そげば、かして葉枯はかるゝ事ことあり。菊譜きくふにも花はなは養やしなひ易やすく葉は

※晴明の頃

二十四節氣の一つ。陰曆三月、春分のあと一五日目、新曆の四月五、六日頃。

は養難しと見えたり。糞水を葉に着べからず。泥付たら

ば清水にて洗ふべし。又曰、萘の汁を以て根に澆ぐべしと云り。

旧根は遠く去るべし。虫を生して害をなす。夏菊は八月根

を分植てよし。寒菊の類も皆秋根分をするをよしとす。

○菊の苗の虫を防ぐ事

菊の苗育てより五六月頃より、穂の軟なるところを虫の嚙

切て穂を失ふことあり。菊虎といふ。形蛸に似て細長し。菊・

艾の古根より生ず。故に古根をうゆべからず。また黒小地蚕

付て苗の軟弱なる節、根もとより啣切るものなり。蛙と云も

秋菊の幹より生じて俄に枯す虫なり。菊吹の吸たる所に卵を

産付おく虫なり。蟻螞・木蝨害をなす也。菊経に曰、死蟹

を水に醸して澆灌へば莠虫を生せずと云り。花鏡に曰、魚

腥水は蛙を去ると云り。蚯蚓・地虫、菊の根を傷しむるときは、

石灰の水を以て元に澆ば自死す。速に河水を以て連澆すれ

ば灰毒を解す。幹に黒蚰の如き物付、幹の瘡は麻を以て

筋頭を裹み、これを將る時は、虫出る象幹虫の如し似、蚕青虫。與、葉一色。

※蛙 日本だけでも約三〇〇種類が知られる昆虫の総称であるキクイムシのこと。主として伐倒木、衰弱木、枯れ木の樹皮下や材を食害する。

※蟻螞 地中にいる昆虫の総称で、主にコガネムシ類の幼虫をいう。

※莠虫 莠は、よく見えて実は悪いもの、の意。害虫の一種か。

※地虫 コウチュウ目コガネムシ科に属する昆虫の幼虫の俗称。地中にすみ、植物の根や腐植物を食べるので、農作物、樹木の害虫となるものが多い。

※連澆 注ぐの意。

※石灰 石灰石や貝殻などを焼いて得られる生石灰を空气中にさらして粉末とした風化石灰、また、水を加えて発熱させ粉末とした消石灰の総称。伝統的に消毒、肥料、漆喰などに使用された。

※幹虫 カラムシ（イモムシあるいはヘビ）のことか。

葉を喰ふ。早く起て針を以て其穴を尋ね、刺殺すべしと云り。
毎朝七つ頃より紙燭にてらして、幹虫・菊虎を採事怠るべからず。鼯鼠は海參を忌。なまこは虫を除くものなり。

○菊を採て貌を作る事

菊の苗五六月ごろ迄は、穂を切てよし。枝に芽を吹せ、一と枝に蒼一つ宛付、皆摘とり、竹或は葦をそへて扶となし、琉球席のほつしにて結付、自在に枝振を付るなり。這せんと思はゞ莖を地へ曲、竹にて止れば根を生じて付なり。

※琉球席

畳表の一種。琉球産の灯心草で織るもの。丈夫で耐久力があり、荷の上包みにも用いる。琉球むしろ。琉球ござ。琉球ごも。琉球畳。

※ほつし

織布などをほぐした糸のこと。この場合琉球藪のこと。

○菊きくの挿木さしきの事こと

洋菊おほきく・中菊ちゅうきくとも苔少つばみすこし見みへたる時とき、切きりて挿さば根ねを生せうず。

八月じゅうじゆん上旬じやうじゆんをよしとす。早はやく挿さすときは、根ねは多おほく生せうずれども花はな

小ちのさしと云いふ。一説いつせつには、大菊おほきくは四五月うてんごろ雨天うてんの節せつ、勢いきほひよき幹みき

を管くだに切きり、肥こやし土つちに挿さし、根ねを生せうじて人糞こやしを澆そげば、甚はなはだよく

肥こえて花はな大おほきく咲さくと云いへり。小菊こきくは自在じざいに挿さして根ねを生せうず。

○菊きく接穂つぎほの事こと

菊きくは挿さしにしてもよく付物つくものなれば、菊きくの根分ねわけして幹みきの堅かたくなり

たるを、四五月頃そぎ接つぎ※にしてよく、親木おやきへ麻あさにて巻置まき置き、付つきたる
ころ根ねを切きるべし。壓條よびつぎ※なり。始接はじめつくべき所ところへ疵きずを付つけ、土つちを練ねりて巻まき、
藁わらにて包つづみおけば、根ねを生せうじて親木おやきへ付つくものなりといふ。

○菊花きくくわ養方やしなひ諸書かたしよしよに載のする所ところの大概たいがい斯しかくの如ごとしと雖いへども、手入ていれ、
培養つちかひ、播種たねまき必かならず是これに止とまるべからず。予あらかじめ其その大略たいりやくなるのみ。

総すべて其その好このんで養やしなふべき物ものの性せいを考かんがへ、類るいを察さつして
土地とちを撰えらみ、時じかう候がうに従したがひ多たねん年の功こうを積つみて鍛煉たんれんし自得じとく

せざれば、心こころの儘ままに自由じゆうはなし難がたし。故かにその一いつしゆ種くわんに貫くわん

※そぎ接

接ぎ木の技法ひとつ。二本の茎を接合する時、互いの茎を斜めに切断して接合した。

※壓條

接ぎ木の技法の一。台木と、母樹についたままの接ぎ穂とのそれぞれの接ぐ部分を削つて寄せ合わせ、活着したあとに接ぎ穂を切り離す。ツバキやカエデで行う。寄せ接ぎ。

通つうする事ことは、老農ろうのうには※しかずと云いり。爰こゝに誌しるす養やしなひ方かた

は、閑暇かんかの人慰ひとなぐさみに前栽にはの余地あきちへ菊きくを植うえて、楽たのしみ

と做なさんといふ素人しろうとの好者すきしやの為ために、大概たいがいを載のするといへど

も、寒中かんちゅうの肥土こやしつちを貯たくはえずして春はるより菊きくを作つくらんと

思おもは、植木屋うえきやに貯たくはえ置肥土おくこやしつちを買入かひいれても可かなり也。大都たいとくわい会

の自在じざいなる、奚是等なんぞこれらを勞ろうするに及およば。頑癡かたくなにして

琴柱ことぢに膠にかはする(36)の誹謗そしりを受うくる事ことなかれと爾しかいふ云。

菊花壇養種了

※老農

農事に熟達し識見の優れた
農民出身の農業技術指導者
たちのこと。

続古今集⁽³⁸⁾
百敷にうつろひ
わたる
にほひそ
まざる
よろつ代の秋

聖武帝御製⁽³⁷⁾
菊の花



菊花異名きくのはなるみやう

花壇綱目ニ所レ載ル

玉牡丹ぎよくぼたん

大輪白咲出し
黄色

天龍寺てんりうじ

薄紫
大りん

大盤若たいはんじや

白もあり黄
大りん

南禅寺なんぜんじ

むらさき中に
蕊あり

建仁寺けんんにんじ

薄色大りん

奥州紅おうしうこう

赤の中輪

真紅しんく

赤の小輪

大紅おほくれな

赤中輪しんあり
朝日とも云

丸まる

箸はし
白大輪

猩しやう

々く
赤の小輪

濡ぬれ

鷺さぎ
白大りん
花よれたり

正まさ

宗むね
白大りん
咲出し藤色

両ふた

面おもて
白大輪

錦にしき

色いろ
大松の葉とも云

美濃紅菊	加賀がう	豊前咲分	大津物狂ひ	伏見常盤	支よ里	より牡丹	濡鷺咲分
み の べ に き く	か が	ぶ ぜ ん さ き わ け	お ほ つ も の ぐ る	ふ し み と き は	き	ぼ た ん	ぬ れ さ き さ き わ け
大輪	大輪	大輪	大輪	黄柿色咲分 大りん	黄の中輪	白の中輪	白黄中輪

牧 慈 難 白 金 大 無 門

童	童	波	縷	砂	紫	類	跡
ど う	ど う	は	よ う	し や	む ら さ き	る い	せ き
大輪	大輪	薄むらさき 大りん	大輪	大輪	小輪	白赤咲分小輪	むらさき黄咲分 中りん

蘇 ^す	海 ^{かい}	北 ^{きた}	と	す	貴 ^き	広 ^{ひろ}	收 ^{しゅう}
蔭 ^{いん}	棠 ^{どう}	の	う	い	富 ^ふ	寫 ^{しま}	金 ^{きん}
菊 ^{きく}	菊 ^{きく}	翁 ^{おきな}	し	楊 ^{やう}	祢 ^き	菊 ^{きく}	紅 ^{こう}
中輪	中輪	薄色大輪	黄の大輪	白黄の大輪	紫大輪	白大輪	大 ^{だい} しゆ ^{しゆ} せん ^{せん} じ ^じ 色 ^{しき} の ^の

桜 ^{さくら}	小 ^こ	老 ^{ろう}	熊 ^{くま}	泡 ^{あは}	大 ^{だい}	手 ^て	白 ^{はく}
			ケ ^が				
菊 ^{きく}	紫 ^{むらさき}	人 ^{じん}	谷 ^へ	盛 ^{もり}	膳 ^{ぜん}	束 ^{つか}	雁 ^{かん}
中輪	中輪	薄色中輪	中輪	白中輪	中輪	大輪	薄色の大りん

黄^き 酒^{しゅ} 一^{いち} 縮^{ちぢみ} 手^て 都^{みやこ} きく
泡^{あは} 呑^{でん} 輪^{りん} 紅^{かう} まりかき 都^{みやこ} まはり たつちう菊^{きく} 銘^{めい} 菊^{きく}
盛^{もり} 童^{どう} 牡^ぼ 丹^{たん} 紅^{かう} まりかき 都^{みやこ} まはり たつちう菊^{きく} 銘^{めい} 菊^{きく}

中輪 中輪 中輪 中輪 中輪 紫中輪 中輪 中輪

せ こ 旭^{あさひ} 唐^{から} 朽^{くち} だ 蜂^{はち} 捨^{すて}
ん ん 松^{まつ} い の 巢^す 子^こ
菊^{きく} 菊^{きく} 葉^ば 葉^ば 黄^{わう} 巢^す 子^こ

中輪 中輪 中輪 中輪 中輪 中輪 中輪 薄色中りん

銀 <small>ぎん</small>	南京 <small>なんきん</small> 金 <small>きん</small> 目 <small>め</small> 貫 <small>ぬき</small>	参 <small>み</small> 河 <small>か</small> 咲 <small>さ</small> 分 <small>わけ</small>	金 <small>きん</small> 盞 <small>せん</small> 銀 <small>ぎん</small> 台 <small>たい</small>	金 <small>きん</small> 盞 <small>せん</small> 金 <small>きん</small> 台 <small>たい</small>	変 <small>かはり</small> わ <small>わ</small> つ <small>つ</small> は <small>は</small>	楊 <small>やう</small> 貴 <small>き</small> 妃 <small>ひ</small>	変 <small>かはり</small> 手 <small>た</small> 束 <small>つか</small>
---------------------	---	--	---	---	---	---	---

白の小輪

黄にして紅
小輪

薄紫と黄
中輪

一と重白小輪
榮黄色

黄の小輪

紫の中輪

中輪

大輪

実 <small>さね</small>	黄 <small>き</small>	黄 <small>き</small>	銅 <small>あか</small> 目 <small>ねめ</small>	金 <small>きん</small> 目 <small>め</small>	三 <small>み</small> 井 <small>ゐ</small>	わ <small>わ</small> つ <small>つ</small>	あ <small>あ</small> さ <small>さ</small>
盛 <small>もり</small>	袋 <small>ふくろ</small>	階 <small>がい</small>	貫 <small>ぬき</small>	貫 <small>ぬき</small>	寺 <small>てら</small>	は <small>は</small>	菊 <small>きく</small>

黄八重中輪

中輪

中輪

薄赤小輪

黄の小輪

紅朽葉咲分
中りん蕊有

紫の大輪

中輪

咲分南禅寺

二階あり紫と黄
紫と白なり

総而七十九種

漢土の菊の種類は菊譜・菊経に委しく見えたり。

夏菊は中輪・小輪のみにて、挿花に多く用ゆ。また小

菊も多し。異名も多くあれども、通称には用ひがたし。

秋の菊も野菊、達摩菊の属は少しく異なり、亦唐種

と唱し玉牡丹、黄玉、御衣黄、鶯毛、泥鶯毛、

博多鶯毛の類は性軟弱に甘味ありて虫の付事も

多しと云り。垂糸粉と云も唐種なり。俗に云薊菊也。

此この変化へんくわせしもの金糸きんしより綵しやぐまさき、赤熊しやぐまさき咲るいの類るいなるべし。

是これは異形ゐぎやうの葩はなびらにて菊花きくくわの如ごとくには見みえず。猶なほくはし委はしくは

嗣編つぎのへんに録しるせり。每まい拳きよに違いとまあらず。

菊きくの養方やしなひかた古今きくやしなひかたにいしへいまたいどうしやうあり大同小異たいどうせうい有ありといへども、土地とちにより

肥土こやしつちに増減そうげんある事ことなれば、江都えどの養方やしなひかたと他国たこくと差さ

別べつせざれば必かならず是これに止とどまる事ことにはあらず。是等これらの事ことも、挿いけ

花はなに数日すじつ菊花きくくわを保たもたする事こと、正徳年中しやうとくねん菊合きくあひの流はや

行りし事ことなど、初輯しよしふに漏もれたる事ことは後輯こうしふに次ついでで誌しるす。

たうせいきくくわのるみやう
 当世菊花之異名

一 玉ぎよく 牡ぼ 丹たん

外外白
 中中むらさき

一 常とき 盤は 鶴つる

真白

一 黄わう 金ごん 台たい

黄色

一 三さん 国こく 伝でん

外外薄薄紅
 中中薄薄むらさき

一 武む 者しゃ 揃ぞろへ

薄薄くくれれななる
 中中薄薄紫

一 瀧たき の 響ひびき

大白

一 銀ぎん 内うち 紅べに

外外ぎん
 内内紅

一 大おお 翅つばさ

黄がら茶

一 森もり 紅くれなる

紅

一 糸いと ひ 染そめ

内外とも真紅

一 丁てう 子じ 紅かう

中中外外紅

一 唐から 錦にしき

外外むらさき
 内内紅

一 紅べに 紫むらさき

中中外外紫

一 内うち 薄うす 紅べに

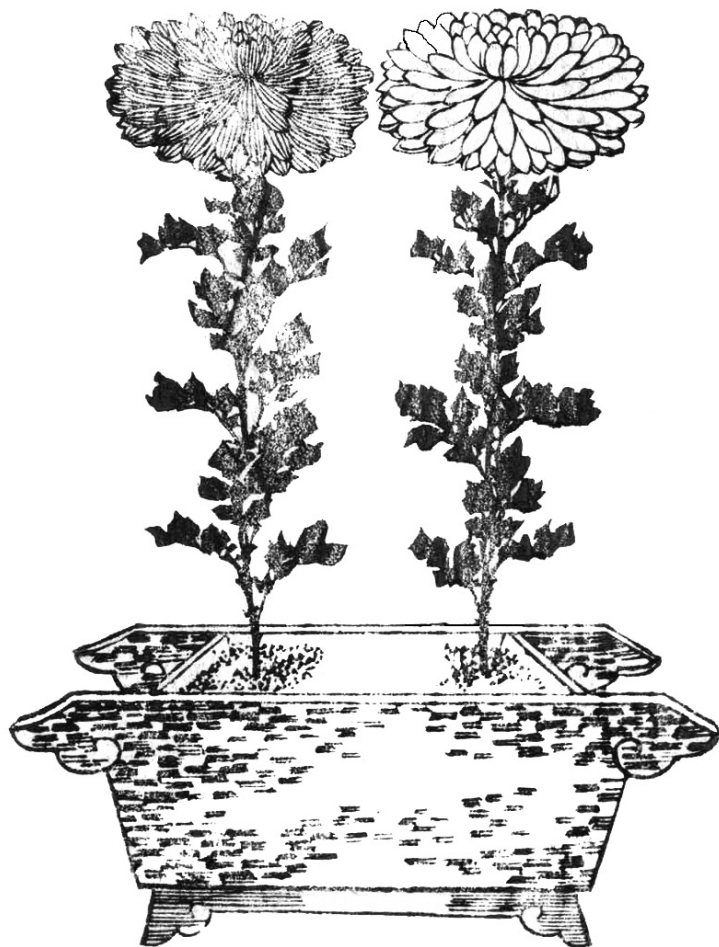
外銀色

通計 すべて 二十八種 しゆ	一 養老瀧	一 龍田川	一 沖の波	一 二王立	一 大翅形	一 銀はせ	一 紫紅
	やうろうのたき	たつたかは	おきなみ	にわうたち	おおつばさがた	ぎん	むらさきかう
	白大輪	外薄きがら茶 内紅	白	紅重ね多し	黄色	内外白 内紅	内外むらさき
	一 色司	一 八ツ響	一 蒲色大輪	一 子渡し	一 二王門	一 大紫	一 白大輪
	いろつかさ	やひびき	かばいろたいりん	こわたし	にわうもん	おほむらさき	しろおほわ
	内外とも真紅	薄むらさき 内こいむらさき	かばいろ	外薄むらさき 内白	外むらさき 内真紅	内外むらさき	白

玉牡丹 ぎよくぼたん

如斯 かくごとき

本葩 ほんはなびら



もりあげまんべ
盛上万重

ぶつこう
仏頂と云

破れ

はなびら

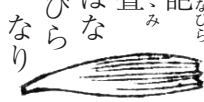
葩

畳

はな

びら

なり



ころびてうじ
燈丁字

のしきき
熨斗咲

ねてうじ
寝丁字

とも云



はなびら



にじりてうじ
躑躅字

ちようしゆくち
銚子口と云

はなびら
葩

いづく
数種

あり



くださぎ
管咲

ふくろさぎ
袋咲

とも云



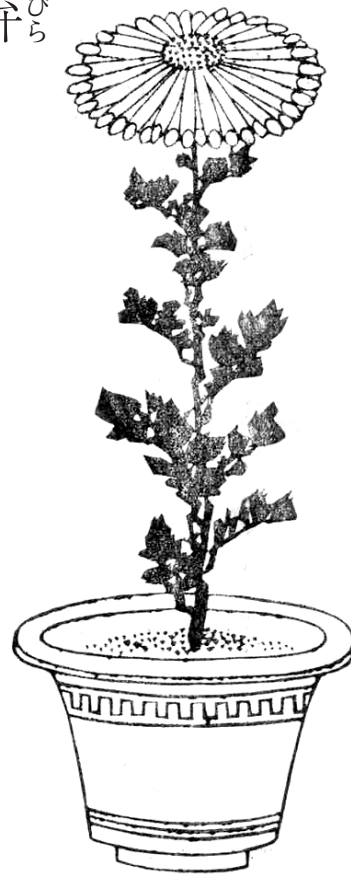
くだひらさき
管平咲 又のし咲

管 くだ
葩 はなびら



かかえくださきつ、はなびら
抱管咲筒弁

か、えくだはなびら
抱管葩

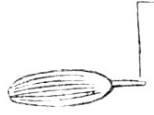


さ、はさぎ
笹葉咲

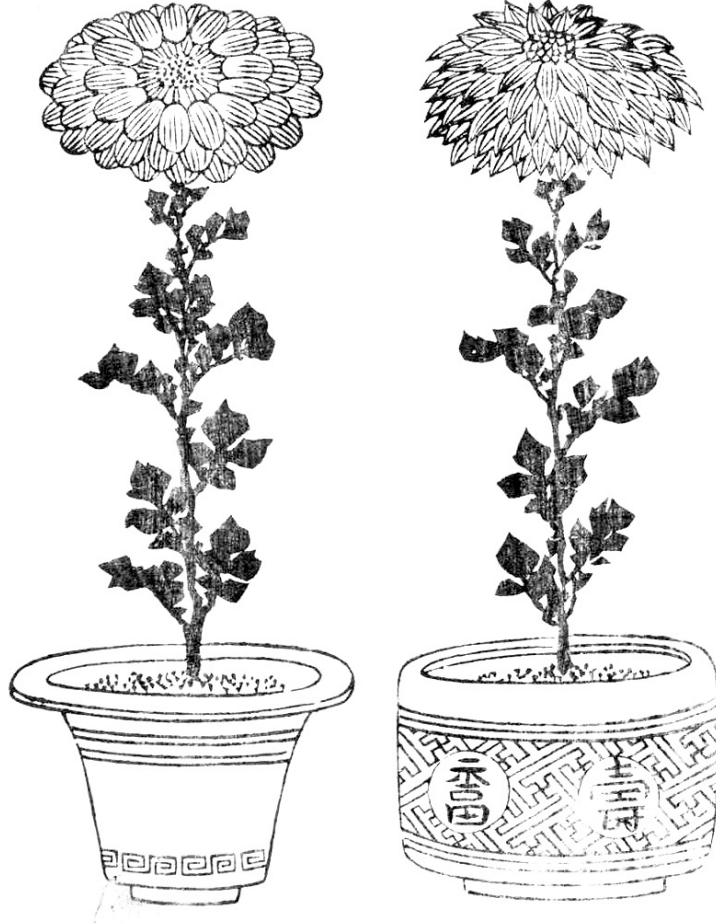
さ、はなひら
笹葉葩



とり
鳥の羽茎也



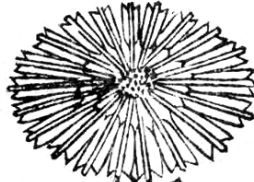
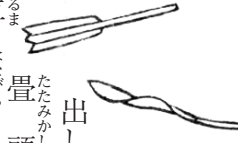
とり
鳥の茎咲



矢車咲一重

やくるまさきひとえ
ひとへを単弁といふ

出しシロ
たみかしら
やぐるま
矢車
はなびら
暈頭



よれぎく
綾菊

よれ花びら



せんへ
千重を千弁といふ



のしき
熨斗咲

やへちやうべん
八重重弁と云

葩筋なきを

まきはなびら

と云

へら
鋒

はなびら
根

丸蓮花葩

れんげはなびら

とがりれんげ
尖蓮花はな

びら

れんげひらさき
蓮花平咲



てうじさき
丁字咲

ほうくわ※
蜂窠と云



てうじれい
丁字鈴と云

たててうじ
立丁字とも云

きんせいあひいろ
紅白黄紫金青間色あり

もりあげてうじ
盛上丁字

もり丁字とも



※蜂窠
蜂の巣の事。

こかむろ
小禿



なみかしら
波頭



つぼさき
葩

つぼさき
壺咲

真まこと
あり

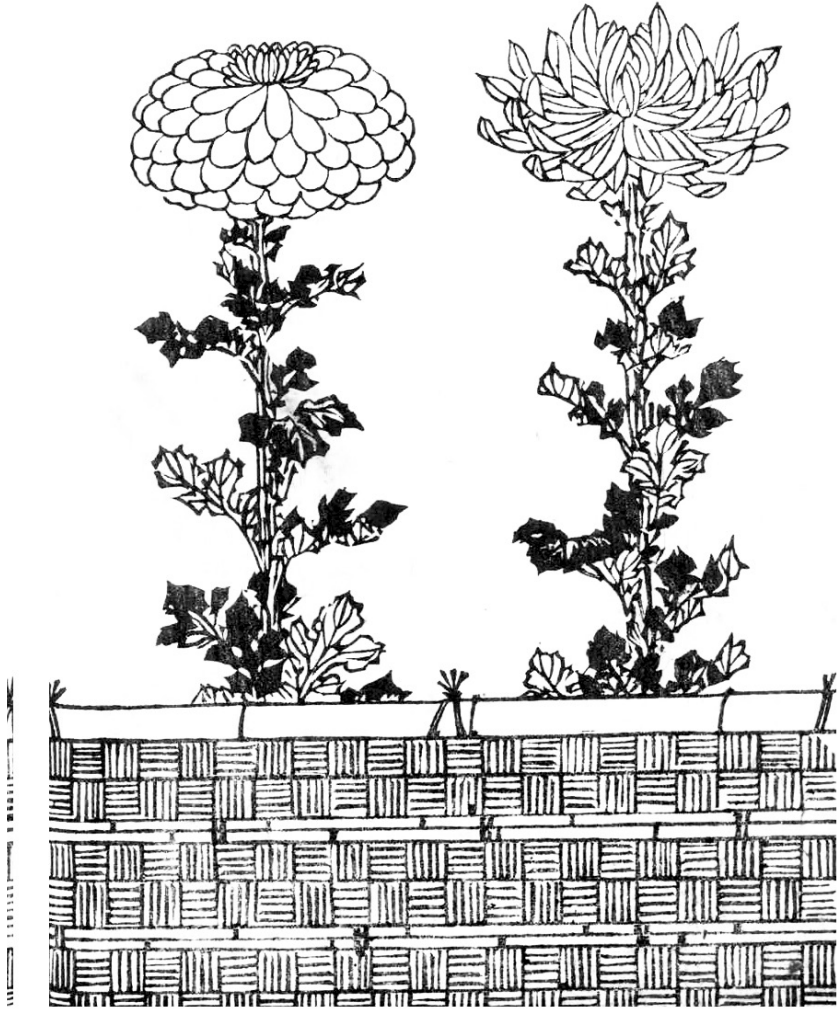
すこし



とひさき
笕咲

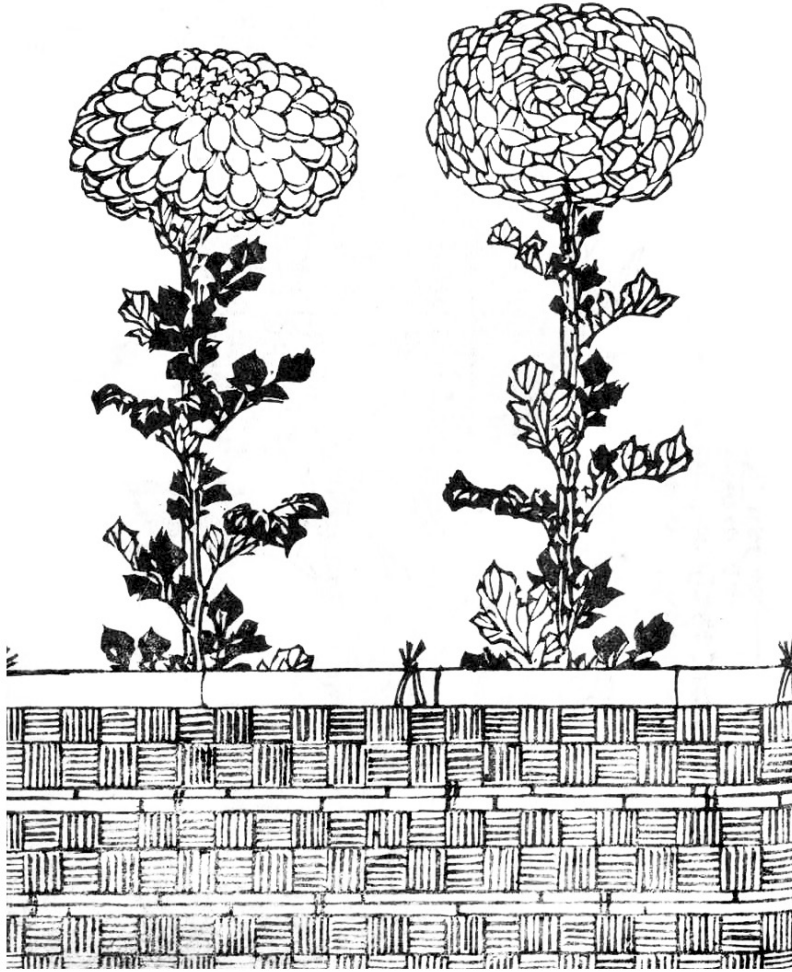
がさき
鶯咲

又幣
と云



かむろてうじ
禿
丁
字

ねぢ
捻
れ
咲
さき



半開
はんびらき

蕊
ずい

又 又
心と心
しん しん
いふ いふ
又 又
菊の菊
きく きく
月代 月代
さかやき さかやき

とも



柳葉
やなぎば

はやめ つぼみ つく
早芽に苞を付るときは
柳葉多し
やなぎばおほ

○布袋造り菊の養方

菅井菊叟翁、年頃菊の栽培の事に精密しく、

凡高と二尺余にして花の輪差渡し六七寸、或は一尺に

及ぶ育方なり。号て布袋作と云。凡菊を造るには

土拵第一なり。江戸にて作るには、譬へば練馬辺の土は

蘿蔔に相應せし故、此土を道灌山の下田畑村あたりの

白瓜を作るによき土と、音羽町より雑司ヶ谷へ出る路の細

根大根を作る土に似たるを、三色等分に合するなり。赤土・

※蘿蔔

ダイコンの漢名。

黒ぼく・浅黄土の類なり。是へ砂土を合するに、神田川

通りの川浚の砂土の如きを三色の土式升に、砂一升

を切交るなり。右の分量にて土二荷に肥し壺荷を合

せて味噌の如く煉交、干鰯魚或は田作の類二升ほど

を克々切交て貯置事なり。扱寒中に至り、右の土

へ下糞五升ほどをよくく切交かため置、雨の係ら

ぬ様に覆ひをなし、三月の時候になりて土を細に揉

ほぐし、雨に当らぬやうに日に乾かし、土籠にて細に

※田作

の。ごまめは片口鰯を干したも

ふるひ置べし。扱花壇にすべき地所を極め、深さ一

尺五寸余も掘て肥し土と入替、廻り四方へ板を打

込て、地鼠・蚯蚓・螻蛄・地虫・鼯を防ぐ手当を

做す事肝要なり。入替たる土に凡曲尺壹尺五寸程

宛を隔て穴を堀、鯉節の煮出し殻と下肥を扱

入、其うへに細にふるひし肥し土を入れ、根分の菊を植

るなり。菊の根分は三月中旬までをよしとす。延すぎ

たるは、土より三分ほど置て上にて挟切、いまだ育兼

たる苗なえと同じ高さたかになる様ように栽付うえつけるなり。然しかしながら

ら、時候じこうと日和ひよりを考かんがあはせ、晴天せいてんつゞ続く時は、育そだち過すぎる

とも切きるべからず。雨天うてんおほ多ければ切きりて栽うえこむ込べし。根分ねわけの

仕様しやうは一ひとつと所ところへ同おなじ菊きくを三本ほんも四本ほんも植置うえおくなり。

其根分そのねわけを切取きりとりたる親根おやねは他たの鉢はちに植うえて傍かたはらに添そへ

置おくべし。彼是取交かれこれとりませて種たねを取違とりちがへましき為ためなり。また

親木おやきかれ枯かわても付芽つけめを以もつて種たねを残のこすべし。根分ねわけの菊きく

土用前後どようぜんごまでに二度ども切込事きりこむことあれば其節そのせつに枯からす

まじき物ものにもあらず。夫故それゆゑに同じ苗おななえを三四本ほんも植うゑ

置おくなり。段々だんぐ育そだつに随したがつて、二三寸きることも切事きるあるべし。六月頃ごろ

に至いたり、凡二尺程およそほどに延のびたるを、幹みきの上細うへほそき所ところにて止とむる也。

小枝こえだの芽めを吹ふきたりとも、猥みだりに摘採つみとるべからず。切下きりさげに

する事こともあれば、外ほかの菊きくと同じ高たかさに成なるやうにすべ

き事ことなり。四五月きりごろ切つけめし付芽つげめをば随分涼ずいぶんすずしき風かぜの

当あたる所ところへ五七日ひも日あての当あてぬやうにして置おき、水みづを少すこしづゝ

霧きりを吹ふくやうにして係かけるなり。菊きくは素湿もとしめりち地いむを忌いむもの

なれば、水を多く澆ば腐る事あり。六月中旬より

後は、柳葉と云て細き葉の芽を吹事あれば、心を

付て是を摘切べし。是を摘きる為に、兼て小枝の

芽を吹たるも摘とらずに置なり。此柳葉の芽を

立る時は、其年花の咲ぬ事あり。苔の如くに見せて、

仕舞のみなり。又彼岸の頃、日々鈴苔と云て菜種の

如き細なるつぼみ四つも五つも一と所に見ゆる事あり。

菊の手入をする者、老人ならば眼鏡を係、たすきにて

袖そでの外ほかへさはらぬやうにして、小楊枝こやうじの如ごとき物ものにてみきにすべつぼみき苔つぼみにさはらぬやうに、廻まはりのつぼみを摘取つみとるべし。

如かくのごとく斯鈴すず苔つぼみの出来できるやうに見みえたらば、水みづ一升いつしやうに下肥しもこえ

二合程がふほどの割合わりあひを以もつて肥こやしを薄うすくなし、葉はへ係からぬ

やうに根元ねもとへ澆養そぎやしなふべし。若肥もしこやし過すぎて葉はの色いろ黒くろく

なり、又または油虫あぶらむしの湧事わくことあらば、花壇くわだん・石台せきだい・鉢植はちうゑともに

菜種なたねを多おほく蒔まき、貝割かひわりより中なかの芽めを三みつつ四よつつ吹ふかせ

て肥こやしの勢いきほひを抜ぬきて、後のちに菜なを取去とりさるべきなり。凡盆前およそぼんぜん

※鈴苔

菊の丸まるい苔つぼみ（薑）を鈴すずに例たとえた。

※石台

長方形の木箱の四隅に把手を付けた容器。植物の栽培に使用する。

※貝割

菜の花（アブラナ）をはじめとしたアブラナ科の種から発芽すること。貝が開いた様に見えることに由来。

後にご至りいたて菊きくの育そだちに従したがひ、細ほそき竹たけを立てたて扶たすけとし、三みつ所ところ
程ほども琉球りゅうきゅうおもてのほつしにて仮結かりゆひすべし。是これより時じ
候かう風雨ふううのはげしき折おりなれば、嵐あらしなどにもまれぬやう
に困かこひて用心ようじんすべし。風雨ふううの防方ふせぎ行かたとゞかずして蒼つばみ
を落おとし葉はを痛いたむれば、数日すじつの手当てあて空むなしくなるへき事こと
なり。斯かく十分ぶんに養やしなひて、蒼つばみを一本いっほんに一つ宛咲づゝさかすれば、
菊きくの丈短たけみじかく花はなの輪大りんおほきく咲さきて、大おほきさ一尺余さくよにも
なる事ことあり。是これを布袋作ほていづくりの菊きくといふ。蒼葩つばみはなびらほつれんと

する頃ころに至いたらば、花受はなうけと雨覆あまおほひをすべし。次にしるす。

○雨除障子拵方あまよけしやうじこしらへかた

総て日覆おほひ雨除あまよけとも障子しやうは、油あぶらを引ひくはあしきもの

なり。潢漿どうさひきにすべし。潢漿どうさは水しやう一升にかはに阿膠ごう五匁ごぼ、

明礬みやうばん四匁しやうの割合わりあひにてよし。凡障子およそほん一本ほんにどうさ一升五

合がふほどの見積みつもりにして、一度どひき干乾ほしかはかして後のちまた二篇へん

三篇へんとひけば、油あぶらひきたる程ほどは保たもつべきなり。

○花受を拵ゆる事はなうけこしらへごと

※潢漿ひき

墨や絵の具などがにじむのを防ぐため、和紙・絹などに明礬と膠を混ぜた溶液をひくこと。

※阿膠

動物や魚の皮や骨などを水で煮沸し、溶液を濃縮・冷却・凝固してつくったもので、主に接着剤に用いられる。

※明礬

硫酸カリウムと硫酸アルミニウムとが化合したものを指すことが多い。媒染剤・皮なめし・製紙や浄水場の沈殿剤など用途が広い。

花受は程むら紙か、極厚き西のうちを丸く切る

なり。花五寸に咲んと思はゞ五寸五分の差渡しに

すべし。花の大小に准ずべきなり。丸き紙の真中に

茎を通すべき程に穴を明け、一方より其穴まで切

こみ、蒼を通して糊にて合せ付るなり。菊の扶にせし竹

にても蘆にても、蒼より二寸も下にて切、はりがねにて受

を拵へ、その竹の切口へさして紙を受さする様に拵るなり。

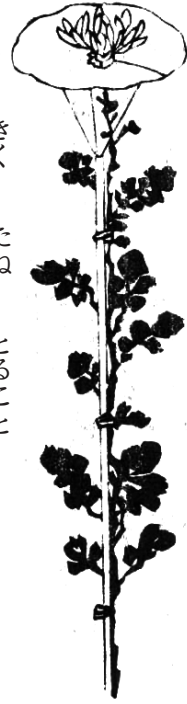


※程むら紙

栃木県程村原産の厚手の楮（こうぞ）紙。包み紙・書画・証書・手形などに用いられた。

※西のうち

常陸国久慈郡西野内村（現、茨城県那珂郡山方町西野内）産の楮紙。質はやや粗いが強いので、油紙の地紙、傘紙、大福帳などに用いられた。



図の如く
すべし

○菊の種を取事

菊花盛り過て日々に衰へ蔦んとする時に至りては、

日覆障子も取、夜氣を受さすべし。葉を切取てより

花びらも切、真中の真ばかり残すなり。是を菊の

月代といふ。月代黄なる所なき様になりたらば、しべより

五寸ほど下にて切紙の袋を拵へ、菊の銘を書て入れ

措^{おく}べし。菊十種^{いろ}あらば袋^{ふくろ}も十にすべし。種^{たね}を蒔^{まく}折^{おり}にも

銘^{めい}を書^{かき}たるちゐさき板^{いた}にても、竹^{へら}の籠^{へら}にてもしるしに立^{たて}

置^{おく}くべし。扱^{たね}種^{たね}にすべき蕊^{しへ}を取^とらば、軒^{のきした}下^{した}など雨^{あめ}の

掛^からぬ所^{ところ}につるし置^{おき}て貯^{たくは}ふべきなり。

○菊^{きく}の実^み生^{しやう}種^{たね}の蒔^ま方^{かた}

菊^{きく}の種^{たね}を蒔^まくべきには、凡^{およそ}大^{おほ}き三尺^{さんせき}に二尺^{にじせき}位^{ぐらゐ}深^{ふか}さ五寸

余^よの筥^{はこ}にして底^{そこ}板^{いた}へ穴^{あな}を五^ごつ六^{ろく}つ明^あけ、是^{これ}へ寒^{かん}中^{ちゆう}

より拵^{こしらへ}置^{おき}たる春^{はる}の土^{つち}を壘^{こな}し、土^{ふるひ}篩^{こまか}にて細^{こまか}にふるひ、

筥はこの中なかへむらなくならし入置いれおき、二月にがつの節せつになりて貯たくはへ

おきたる種たねをよくく揉もみて、蒔板まきいたにてざつと押付おしつけ、その

上うへへ土つちを些すこしふるひ、掛木かけきにても竹たけにても、ちるさきもの

に菊きくの銘めいを書かき、蒔まきたる所ところへしるしに立置たておき、筥はこのふちと

土つちとの間あいだ一寸余よもあるやうにして、横よこに竹たけにても木きにて

も涉わたし、蘆簣よしすを係かけ、筵むしろにても薦こもにても濡ぬちして、種たね

を風かぜの吹散ふきちらさぬやうに蓋ふたをしめ置おき、暖気だんきになりて風かぜも

なく日和ひよりのよき時ときは蓋ふたを取とり、蘆簣越よしずごしに日ひを当あてるなり。

余寒よかんのさむき風かぜに当あてるはわろし。土つちかはきたらば如露ぢよろ

にて水みづを少すこしづゝ係養かけやしなふべし。二葉ふたばの芽めを出いだしてより

蓋ふたに枕木まくらぎをかいて段々だんぐたか高くすべきなり。是これよりは丹精たんせい

して日ひに当あて、水みづを係かけて雨あめに当あてず手ていれをすべし。一ひと所ところへ塊かたま

り芽めを出いだしたるは分わけて植うゆべし。外ほかに分廻ぶんまはしと云事いふことあれども、

是これは各工風おのくくふうにてよろし。斯種かくたねを蒔まき実生みばへにして

菊きくを作つくることは古ふるくは稀まれなりと云いふ。適種たくたねを蒔まきものあれば

砂土すなつちにて床とこと云いひて菊きくを蒔まき、苗なえの育そだつべき程ほどの囲かこひを

拵へ、竹にて稲木の如くなる物をしつらひ、夫に菊を一尺

程に切置て、転倒に結付、自然と種床の中に落て

実生するなり。是を分植と云り。此苗は花咲時節に

却て咲ぬも出来るものなり。実生の菊は種変じて花

かはれども、一と重多くよき花は咲ぬものなり。按るに千

重のよき花の菊は実すくなくして多く持ぬものなる

べし。近来は実生に千重多く出るは、栽かた培の仕方

よきゆゑ、自ら種をよく持と見えたり。実生にして作ことは、

ひとりむしや いへ きく いで ころより せけん おほ
独武者と云る菊の出し頃より世間に多くなりて、

いま なたね まくごと
今は菜種を蒔如くにしても実生によき花あり。造

くわ わざ じぎ ひあたり ところにては
化の所為も時宜によるにやあらん。日当よき処にては

のきしたかき ほと ふゆ うちまきすて 春蒔た
軒下垣の辺りにても、冬の内蒔捨にせしも、

みばへ こと 然れども 前にしるす如く、 培
るも実生する事となりぬ。然れども前にしるす如く、

まく たね おほ かは かならず はな もつ
して蒔ときは種も多くは変らず、必よき花を持もの也。

○ 菊花壇仕舞様

きくくわだんしまひやう
花壇仕舞やうとて別儀有にもあらねども、 近來は

実生みはへを多くおほさするゆゑ、種たねを取とるには遅おそく仕舞しまふが能よき

なり。花蔞はなしぼみて后のち、種たねを取とるべき花はなを見分みわけ、一尺また又は

五寸位くらゐに切きり、軒下のきしたなどに繩なはを引ひきて、切きりたる菊きくの莖くきを

なはに挟はさみて干乾ほしかはかすもあり。種たねの取方とりかたは前まへに委くは

しく誌しるせり。元株もとかぶの親木おやき、花壇くわだんより他ほかへ移うつし植うゆるとも、

夫々それづに札ふだを付置つけおくべきなり。実生みおひはさまざまへんくわに変化へんくわし

ていまだ名なの付ぬ菊きくも出来できるものなれば、種類しゆるいを分わけ

て札ふだを付措つけおかざれば、翌年よくとしは必忘かならずわするゝこと多おほし。花壇くわだん

帳ちやうに其順そのじゆんを記しるし置おくもよき也なり。

菊きくを作りて愛樂めでたのしむことは、古いにしへより廢はいする

事ことなけれども、近來きんらいは菊きくを以て種々さまざまの状かたち物もの

に造りて、其細工(44)を競ふこと流行りうかうして、年毎としごとに諸所しよく

に多おほし。然されば草木栽培そうもくさいばいの業げうに預あづからぬ者ものも、秋あきの

樂たのしみに花壇くわだんに菊きくを造り愛めづる者もの多おほき故ゆゑに、僅わずかに其その

荒増あらましを誌しるして好者すきしやの一助いちじよに備そなふるものなり。

布袋造り菊ほていつく きくの養方やしなひかた了

跋

夫菊は自然の徳を備へて神農これを上品とし

給ひ、康風おのづから神仙となる。東籬に採ては真意

を弁へ、前栽を詠じては根の枯ぬ事をする。実なるかな。

緑葉枯て落ず、黄花移りて零へず、誰が家に欵

染出して、其色さまざまあり。猶近来其徳行れて世に

盛んにして、奇を好み珍らしきを愛る事となりぬ。余が

師菊叟翁は其養方に妙を得たればとて、布袋造

※東籬

屋敷の東側のかきね。陶潜の「飲酒詩」の「採菊東籬下」から、菊に関していわれることが多い。

と称する菊の栽かた培のあらましを示して、普く世の

好者の一助ともならんと、当世の菊花二十八種の

図を巻首に出し、肥し土の事、根分実生の養方、

花壇に種を採入るゝ迄を委く誌せり。凡秋闌る

花の樂しみは、菊花を最上とす。冬季の冬牡丹、寒

菊、雪割草、水仙花の属ひはあれども、菊花は後の録の

限りと云べし。花を好む者争これを愛せざらんや。

丙午の春
菊叟門人
玉英舎主人誌